

『賦光源氏物語詩』を読む（二）

—— 若紫・末摘花・紅葉賀・花宴 ——

本 間 洋 一

五 若紫

下從盤折望柴架 盤折を下從りて 柴の架を望めば

若紫濃姿接僕僮 若紫の濃やかなる姿 僕僮に接す

露点残苔城北寺 露は残苔に点ず 城北の寺

霞懸遠樹洛陽宮 霞は遠樹に懸かる 洛陽の宮

一宵旅宿逢春別 一宵の旅宿 春の別かれに逢ひ

三昧梵音驚暁夢 三昧の梵音 暁の夢を驚かす

禪室草筵多感興 禪室の草筵 感興多し

花零瀧水濺簾櫳 花は零ち 瀧水は簾櫳に濺ぐ

（七律。僮・宮・夢・櫳（上平声東韻））

首聯第二句に卷名が詠込まれているのは見ての通りだが、こ

の一首は物語の前半の北山の寺の場面を詠むばかりで、その帰洛後のことなどには全く触れるところがない。一聯毎に訳出すると次のようになるだろうか。

つづら折を下つて小柴垣のある家を眺め渡すと、（後に）

若紫（と呼ばれることになる女性）のお仕えしている者たちと交わり接している美しい姿が見やられます。

この都の北山の聖（修行者）の寺では、秋の露が損われた苔の上に降り敷き、宮城の方を見やれば、遙か遠い木々にかすみがかかりけぶるようです。

一晚の旅の宿りは（三月晦のこととて）春とお別れするめぐり合わせとなり、（某の僧都（紫の上が身を寄せている祖母尼の兄）の）法華三昧を行う読経の声に、光源氏様は

夜明け前の夢からはつとめざる思いをされたことでした。(僧都と) 柴の庵の如き堂にて対面しあたりを眺めていると、心に面白く思われることも多く、花が散り滝水が格子窓にそそぎかかるという風情でございます。

首聯の「盤折」は曲がりくねる山中の道をいう。「誰知中有路、盤折通巖巔」(「遊三悟真寺詩」『白氏文集』卷六・〇二六四)と見え、「雪縈三九折、燈一風卷三万里波」(沈約「從軍行」)「九折(ツ、ラヲリ、坂也)」(『色葉字類抄』)というに同じ。「柴架」は小柴垣のこと。「架」はまがき・ませの類で、白詩にも「似レ火浅深紅圧レ架、如レ錫氣味緑粘レ台」(「薔薇正開春酒初熟(下略)」『白氏文集』卷一七・一〇五五)や「繞廊紫藤架、夾砌紅葉欄」(「傷宅」同上卷二・〇〇七七)などと薔薇の垣や藤棚が詠まれていた。「濃姿」は珍しい語型だが、顔色うるわしく美しい姿を言う。「濃」は色の濃いことが基本的な意だが、ここではこまやかに「行届き整って美しい様を表現する。「濃粧」「濃艶」などと王朝漢詩で用いられる語を想起させる。「僕僮」は僮僕に同じく、仕える者のこと(平仄・押韻の関係で「僕僮」とする)。この一聯は、瘡病ぶつびょうを患う光源氏が、北山の「寺のさまもいとあはれな」(①200頁4行)

る処を訪れ、加持を受けた後を受けて綴る。彼は「すこし立ち出でつつ見渡し給へば、高き所にて、ここかしこ、僧坊どもあらはに見おろさるる」(①200頁13〜15行)処に立つ。すると「ただこのつづら折の下に、同じ小柴なれど、うはしうしうわたして、清げなる屋、廊など続けて、木立いとよしある」(①200頁15行〜201頁2行)住居のあるのが目にとまる。興味を抱きはするものの、供人や良清(播磨守の子)と噂話をして過す光源氏が、そのうち所在なきに任せて「夕暮のいたう霞みたるにまぎれて、かの小柴垣のもとに立ち出でたまふ」(①206頁11〜13行)。するとそこにいたのは「きよげなる大人二人ばかり、さては童べぞ出で入り遊ぶ中に、十ばかりやあらむと見えて、白き衣、山吹などの葵えたる着て走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容貌なり。髪は扇をひろげたるやうにゆらゆらとして、顔はいと赤くすりなして立てり」(①206頁6〜11行)と描き出される若紫である。「雀の子を犬君が逃がしつる、伏籠の中に籠めたりつるものを」(①206頁14〜15行)と言う口惜しそうな口ぶり、そして「つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき・髪ざしいみじううつ

く、ねびゆかむさまゆかしき人かな」(①207頁10〜12行)などという「濃姿」の様子をしつかり記憶にとどめる光源氏であつた。

「残苔」は損なわれた苔。「詩酒友多墳宿草、笙歌家半地残苔」(源為憲「旧遊安在哉」『類聚句題抄』372)などと、うち棄てられて歲月を経たことを暗示する場合に用いられることが多い。残は衰残のイメージ、苔は山中の雰圍氣を醸し出す。「遠樹」は遠方の木立。「孤煙生乍直、遠樹望多円」(「渡淮」)『白氏文集』卷五四・二四一五)。「望長安城之遠樹、百千万莖齊青」(源順「春生霽色中」)『和漢朗詠集』卷下・眺望626)『本朝文粹』卷八・218)などに見える。「洛陽宮」とは都の宮城を言うが、本朝ではしばしば「東京号洛陽城」(「拾芥抄」京都程部)「洛陽トハ只東京ト云義也。西ヲ長安ト云、東ヲ洛陽ト云。其制前後アレ共、今本朝ニハ兩都一郡ナル故ニ、共呼テ同ク京師ノ名トスル歟」(塵添瑣叢鈔)卷一六・鴻臚宮事)などとあり左京を指すとされる。この領聯の三句目は、「さてもいと美しかりつる児かな、何人ならむ、かの人の御かはりに明けくれの慰めにも見ばや、と思ふ心深うつきぬ」(①209頁13〜15行)などと、若紫に執着する光源氏が、その思いを養育してい

る祖母の尼君に訴える場面と関わる。「初草の若葉のうへを見つるより旅寝の袖もつゆぞかわかぬ」(①216頁4〜5行)と詠んだ光源氏への尼君の返歌「枕ゆふ今宵ばかりの露けさを深山の苔にくらべざらなむ」(①216頁14〜15行)をふまえ綴つたもの。「城北寺」とは直接的には「北山になむ、なにがし寺といふ所にかしこき行ひ人はべる」(①199頁4〜5行)と癩病に悩む彼が訪ねた聖の寺を指すだろうが、そのすぐ近くに若紫を見出した小柴垣の僧坊もあつた。第四句の「霞懸」はかすみがかかることを言う。治病の勤行の間、気分転換を勧められた彼が「背後の山に立ち出でて京の方を見たまふ。はるかに霞みわたりて、四方の梢そこはかとなうけぶりわたれるほど」(①201頁15行〜202頁2行)にいたく感歎する場面を詠んだものである。物語では北山から都城を眺望するのだが、東山から春霞にけむる都を詠む早い作に「躋翠嶺而西顧、家郷悉没煙樹之深」(橋在列「山寒花不坼序」『和漢朗詠集』卷下・眺望625)があり、「山高み都の春を見渡せばただひとむらの霞なりけり」(大江正言「長楽寺にて故郷の霞の心をよみ侍りける」『後拾遺集』卷一・38)と続き、「願望華洛求名処、不_レ_レ過_レ翁々一片霞」(源経信「遊長楽寺」)『本朝無題詩』卷八・

526) などと継承される同工の表現がある。前引の物語本文も表現の系譜からすると当時としては新鮮な視点であつたと言いつてであらう。

「一宵」は「一宵、光景潜相憶、両地陰晴遠不_レ知」(『江楼月』『白氏文集』卷一四・〇七六一)「箭漏_レ応_レ寛周歳会、銅壺莫_レ從_レ一宵親」(七月七日代_二牛女_一惜_二曉更_一)「田氏家集」卷下)などとあり、一晚中の意。「旅宿」は旅の宿(をとる)こと)で「遥聞旅宿夢_二兄弟_一、_レ応_レ為_二郵亭名_一棟華」(『棟華駅見_下楊八題夢_二兄弟_一詩上』『白氏文集』卷一八・一一八二)「若使_二韶光知_二我意_一、今宵旅宿在_二詩家_一」(『送春』『菅家文章』卷五『和漢朗詠集』卷上・三月尽54)とある。「春別」は「煙郊春別遠、風磧暮程深」(春送_下盧秀才下第遊_二太原_一詞中_中嚴尚書上)『白氏文集』卷一三・〇六五一)とあるように春の時節の下の別れの意が普通。ここでは春との別れの意で、「花だにも散らで別るる春ならばいとかくけふを惜しましやは」(藤原朝忠『新撰朗詠集』卷上・三月尺52)「身にかへて何嘆くらん大方は今年のみやは春に別るる」(殷富門院大輔『風雅集』卷三・春歌下・二九六)などという類。光源氏が北山を訪れたのは「三月のつごもりなれば、京の花盛りはみな過ぎにけり。

山の桜はまだ盛りにて、入りもておはするままに、霞のたたずまひもをかしう見ゆれば、かかあるありさまもならひたまはず、ところせき御身にて、めづらしう思されけり」(①199頁12行)200頁4行)という時節であり、逗留もわずか一泊に過ぎなかつたので、第五句のように詠むのである。「梵音」は読経の声。「羅幌樓_二禪影_一、松門聽_二梵音_一」(王勃『遊_二梵宇覺寺_一』)「水清塵斷、風靜梵音明」(笠仲守『冬日過_二山門_一』)『經国集』卷一〇)とある。「曉夢」は夜明け前の夢。「万里山川分_二曉夢_一、四隣歌管送_二春愁_一」(許渾『贈_二河東虞將軍_一』)『千載佳句』卷上・閑居46)「孫帷垂兮猶眠、曉夢_二芬芳書帙之下_一」(紀齊名「入_レ夜花如_レ雪詩序」『新撰朗詠集』卷上・花付落花103)は用例の一斑。この第六句は、「曉方_二なりにければ、法華三昧行_二ふ堂の懺法の声_一、山おろしにつきて聞こえる、いと尊く、滝の音に響き合ひたり。(源氏)吹き迷ふ深山おろしに夢さめて涙催す滝の音かな」(①219頁3〜7行)を念頭に置いて詠んだものであろう。

「禪室」は僧坊。禪房に同じ。「可_二禪房無_二熱到_一、但能心靜即身涼」(苦_レ熱題_二恒寂師禪室_一)『千載佳句』卷上・避暑13『和漢朗詠集』卷上・納涼161『白氏文集』卷一五・〇八

五二)「法堂寂々煙霞外、禪室寥々松竹間」(藤原冬嗣「扈三徒梵釈寺」)『文華秀麗集』卷中)とある。ここでは僧都が法華三昧の勤行をする堂(前述)を指す。「草筵」はくさむしろ。ここでは「草の御むしろも、この坊にこそまうけはべるべけれ」(①210頁6〜7行)とあり、旅の宿を暗示し、「この坊」とは某(をがし)の僧都の庵(いぢや)を指す。この語自体は余り詩語として一般的ではないかも知れないが、草褥というに近い。「草鋪_二地茵褥_一、雲卷_二天幃幔_一」(和望_二晝_一)『白氏文集』卷五二・二二六三)という含意に発するであろう。ここはかの僧都の庵の庭に草花が一面に生えている状態を指して言う。「いと心ことによしありて同じ、本草をも植ゑなしたまへり」(①211頁6〜7行)とか、次句の「花零」との関係からしても「明けゆく空はいといたう霞みて、山の鳥どもそこはかとなく轉りあひたり。名も知らぬ本草の花どもいろいろに散りまじり、錦を敷けると見ゆるに、鹿のたたずみ歩くもめづらしく見たまふに、なやましさも紛れはてぬ」(①219頁9〜12行)と本文にあることを反映しているものと考えられる。「感興」は心に湧いてくる面白味。白詩では題詞に用いられている。「莫_レ笑_レ老来多_二感興_一、一歌三樂_二慕_二采翁_一」(輔仁親王「彈_二琵琶_一」)『本朝無題詩』卷

二・92)とあり、風情という程の意でも良からう。先掲引用文中に見えたように、さまざまに目を楽しませてくれるものがあり、「なやましさも紛れはてぬ」光源氏であった。「瀧水」については既に第六句のところで触れているように「堂の懺法の声、山おろしにつきて聞こえくると尊く、滝の音に響き合ひたり。(源氏)吹き迷ふ深山おろしに夢さめて涙もよほす滝の音かな」とある処や、彼が都に帰還する場面に「岩隠れの苔の上に並みみて、土器まるる。落ち来る水のさまなど、ゆゑある滝のものとなり」(①223頁4〜6行)など見えていたことも喚起されよう。「簾櫳」はすだれの掛かった格子窓のこと。「落日隠_二簾櫳_一、升月照_二簾櫳_一」(謝惠連「七夕詠_二牛女_一」)、『芸文類聚』卷四・七月七日)「微月透_二簾櫳_一、螢光度_二碧空_一」(元稹「会真」)など見える。この若紫の巻の物語本文中で格子窓が出てくるのは、滝水のシーンからはかなり後になる。九月に尼君が亡くなり、若紫は十月には京の屋敷で暮らしていたが、その邸を光源氏が訪れる場面に「霰降り荒れて、すこき夜のさまなり。いかで、かう人少な心細うて、過ぐしたまふらむ、とうち泣いたまひて、いと見棄てがたきほどなれば、御格子まゐりね。もの恐ろしき夜のさまなめるを、宿直人にてはべらむ。

人々近うさぶらはれよかし」(①24頁5〜9行)と見えるのがそれだ。だが、漢詩句は勿論この場面を詠んだものではあるまい。確か北山の住居に格子窓の描写はなかったが、ここは、法華三昧を行っている堂、若紫が暮らしていた部屋の格子窓を意識していると考えるべきであらう。

六 末摘花〈若紫并之二〉

月宵琴語是朋友 月の宵の琴語は 是れ朋友なり

媒介豈非命婦功 媒介 豈に命婦の功に非ざらん

縦以貂裘為服用 縦たとひ 貂裘を以て 服用と為すとも

若看馬鼻詎交通 若し馬の鼻を看ば 詎なか交はり通はん

廢籬望雪臥叢重 廢すたれし籬まがきに雪を望むに 臥叢重く

壞宇待明帰路忽 壞くわれし宇いへに明を待ちて 帰路いそみち忽はし

末摘花名聞一詠 末摘花の名は 一詠に聞こゆるも

雖馴梅艶尚馱紅 梅艶なほに馴ると雖も尚なほし紅くれなるを馱いとどふ

〔七律。功・通・忽・紅(上平声東韻)〕

尾聯の第七句に卷名が詠み込まれている。第八句「馱」(仄声)は平仄上から言えは「嫌」(平声)あたりでありたいところであるが、とりあえず聯毎の訳を記せば次のようにならうか。

(故常陸宮親王の娘は)月の宵に弾く琴の音を親しい友とするような女ひとでございました。(その彼女と光源氏の)仲をとりもつたのは、一体大輔命婦のお手柄でなくてなんでございましょうか。

たとえ(立派でこうばしい)黒貂くろきの皮衣かわぎぬを(彼女が)表着にしてらしたにしても、もし(普賢菩薩様の乗物かと呆おろれます程に)高く長い馬のような鼻を拝見致しておりましたなら、一体誰が彼女と契り、そのもとに通つたり致しましたこととございましょうか。

荒れ果てた(淋しげな彼女の家の)前栽に積もる雪を眺めやれば、草は雪の重みにたえかねて横に臥すかと思えます。(そして)壊れかけた(彼女の)住居にて(時を過ごし)夜明けを待つて、あわただしく帰路を急ぐ光源氏でございました。

(お相手の女かたの)末摘花というお名前は、(なつかしき色ともなしに何にこの末摘む花を袖にふれけむ)という)一首の和歌ですっかり有名となりました。(その末摘花とは紅の染料の材となるベニバナのことでございますが、その紅くれない色の花として)親しみを感じますのは(何と申しまし

ても)紅梅の花の濃くつややかな美しさでございまして、
紅の(花ならぬ鼻)のお方についてはどうにも(光源氏様
は)お好きになれないようでございます。

「月宵」は月の出ている宵。「宵月向掩扉、夜露方当
白」(鮑照「和王義興七夕」)は宵の月で、語形はやや異な
るが、漢詩ではこちらで表現するのが一般だろうか。ここは平
仄の為に転倒させたと考えても良いだろう。「琴語」は琴の音
のこと。「今夜聞君琵琶語、如聽仙樂耳暫明」(琵琶
行)『白氏文集』卷一一・〇六〇三)「巴猿啼哭夜常聞、何處
琵琶似語」(寄微之二)同上卷一七・一〇六三。『千載佳
句』卷下・妓樂七三四)などであるのは参考になろう。「朋
友」はともだち。「妻孥朋友來相弔、唯道皇天無所
知」(哭微之二首)其一『白氏文集』卷五七・二七八三)「同病
求朋友、助憂問古先」(叙意一百韻)『晉家後集』など
よく見える一般的語彙。「媒介」は仲人、男女の間をとりもつ
人。「父母被欺媒介言、許嫁長安一少年」(紀長谷雄「貧
女吟」『本朝文粹』卷一・18)とあり、媒氏というに同じ。「命
婦」は宮中に仕える女性で、「分庭皆命婦、對院即儲皇」
(渭村退居寄禮部崔侍郎翰林錢舍人詩一百韻)『白氏文集』

卷一五・〇八〇七)「命婦(礼曰。婦人無爵。從夫之爵。坐
以夫之齒)。謂夫為大夫、則婦為命婦」(『白氏六帖』
卷一四・婦人封)ともある。ここは大輔命婦を指すこと言うま
でもない。首聯は、かの命婦が故常陸宮の姫君(末摘花)のこ
とを語る場面、即ち「心ばえ容貌など深き方は知り侍らず。か
いひそめ人疎うもてなし給へば、さべき宵など物越しにてぞ語
らひはべる。琴をぞなつかしき語らひ人と思へる、と聞ゆれば、
(源氏)三つの友(琴詩酒。白詩「北窓三友詩」に依る)にて、
いまくさやうたてあらむ、とて(中略)このごろのおほろ月
夜に忍びてものせむ(中略)十六夜の月をかしき程におはした
り」(①267頁4行〜268頁4行)を意識して詠む。そのいらした
夜、光源氏は「ただ一声催しきこえる、空しく帰らむがねたか
るべきを」(①268頁7〜8行)と命婦を通じて琴の演奏を所望
する。ともあれ、彼はその人と音色にいたく興味をそえられる
のだが、そもそもそれは大輔命婦の口の上手さに預るところが
大きいと詠んでいるのである。

「貂裘」はテンの皮衣。「東觀漢記曰。東平王蒼來。章帝
以三王触寒涉道、賜三王乘輿貂裘」(『芸文類聚』卷六七・
裘)「梁簡文帝謝東宮賜裘啓。(中略)才慙三齊相、受白狐

之飾^一、徳謝^二漢審^一、均^三黒貂^二之賜^一」(『初学記』卷二六・裘)などに見え、「蟬鬢^レ誇^三丞相^一少^一、貂裘^レ不^レ覺^三太原寒^一」(『寄^三太原李相公^一』、『白氏文集』卷五五・二五五)と詠まれる貴重な防寒具であつた。本朝の書にも「四声字苑云。貂^レ音洞、和名天^レ似^レ鼠黄衣。皮堪^レ作^レ裘」(『唐韻云。貂有^三黄貂黒貂^一。出^三東北夷^一。黒貂、和名布流木^一。)(『和名抄』卷一八・貂・黒貂)とある。「服用」は身につける意。「子弟猶婦^二器衣服裘衾車馬^一、則必獻^三其上^一而后取服^二用^一其次^一」(『礼記』内則)「禁^三文武百寮^一六位以下用^三虎豹熊皮及金銀^一飾^中鞍具并横刀帶端^上(中略)婦女依^三丈夫蔭^一服用亦聽^レ之」(『続日本紀』靈龜元年九月一日)とある。少し長くなるが、この領聯は末摘花を目にした光源氏の驚きが綴られる以下の部分に依つていよう。「まづ、居丈の高く、を背長に見え給ふに、さればよと胸つぶれぬ。うちつぎて、あなかたはと見ゆるものは鼻なりけり。ふと目ぞとまる。普賢菩薩の乗物と覚ゆ。あさましう高うのびらかに、先の方少し乗りて色づきたること、ことの外にうたであり。色は雪はづかしく白うて、さ青に、額つきこよなうはれたるに、なほ下がちなる面やうは、大方おどろおどろしう長きなるべし。瘦せ給へること、いとほしげにさらぼひて、肩のほど

など痛げなるまで衣の上まで見ゆ。(中略)着たまへる物どもさへ言ひたつるも、物言ひさがなきやうなれど、昔物語にも人の装束をこそまづ言いたためれ。聴色のわりなう上白みたる一かさね、名残りなう黒き桂かさねて、表着には黒貂の皮衣、いと清らにかうばしきを着給へり。古代のゆゑづきたる御装束なれど、猶若やかなる女の御装ひには似げなうおどろおどろしきこといともてはやされたり。されどげにこの皮なうては、はた寒からましと見ゆる御顔ざまなるを心苦しと見給ふ」(①292頁11行〜294頁1行)。末摘花の長く赤い鼻は『観普賢經』に「普賢菩薩乘^三大白象^一、鼻如^三紅蓮華色^一」とあるのに依ると説くのは既に古注に見えるところだが、本詩ではそれによらず「馬鼻」、馬のような長い鼻面として詠む。その方が読者のより卑近な実感に寄添うように思われるが、その場合鼻の赤い色は表現し尽くせぬこととなる。つまり、紫式部の表現的確さが改めて認識されるというわけなのだ。「交通」は「諸所^三交通^一、非^三豪傑大俠^一」(『史記』渥夫伝)とあり往来交際すること。ここでは情交通好の意に用いる。雨夜の品定めでの左馬頭の話を想い起こし「かの人々の言ひし律の門は、かうやうなる所なりけむかし、げに心苦しくらうたげならん人をここにすゑて、

うしろめたう恋しと思はばや」(①295頁5〜8行)と光源氏は思うものの、目の前の彼女には「我ならぬ人はまして見忍びこむや」(①295頁12〜13行)と落胆せざるをえないのが現実であった。第四句は、普通の人なら「こんな醜女の所へ通うもんか」と言い立てるに違いないその一方で、これは光源氏ならではのことなのだ、即ち彼が彼女の亡き父(故親王)の魂の導きと思いつつ、その生活を援助することになる後の展開を暗に称える意も含んでいると稿者はみたいのだがどうであろうか。

「廢籬」は荒れてうち棄てられたままの垣根のこと。「孤花 裏_レ露啼_二残粉_一、暮鳥栖_レ風守_二廢籬_一」(惟良春道「題_三后妃旧院_二」『和漢朗詠集』卷下・故宮付破宅534)はその一例。末摘花邸は「いといたう荒れわたりてさびしき所」(①289頁4行)であり、「荒れたる籬の程うとましく」(①280頁1行)思われてならない処で、「望雪」とからめるなら「前の前栽の雪を見給ふ。踏みあげたる跡もなく、はるばると荒れわたりて、いみじうさびしげなる」(①291頁19行)などと、荒涼としたイメージが繰返し描かれていた。「臥叢」はここでは雪の重みで横倒しになつてゐる草むらのこと。「臥叢無_レ力含_二醉粧_一」(「牡丹芳」『白氏文集』卷四・〇一五二)と見えるのは草むらに横倒

しになつてゐる牡丹の様子を詠むもの。物語本文中には前記の景は見えないようだが、前栽に降りかかる雪からの連想か、或は「橋の木の埋もれたる、御隨身して払はせ給ふ。うらやみ顔に松の木のおのれ起きかへりてさとこぼるる雪」(①296頁3〜4行)あたりも念頭に置いて言うものだろうか。「壞宇」はこわれ崩れた家のことで、「行潦毀_二我墻_一、疾風壞_二我宇_一」(「効_二陶潛体_一詩十六首」其二、同卷五・〇二二三)などであり、「御車寄せたる中門のいといたうゆがみよろほひて、(中略)いとあはれにさびしく荒れまどへるに、松の雪のみあたたかげに降りつめる」(①295頁1〜5行)末摘花邸を指すこと言うまでもない。「待明」は「摩_レ弓拭_二箭鏃_一、夜射不_レ待_二明_一」(「答_二箭鏃_一」同卷二・〇一〇八)のように夜明けを待つ意。ここは光源氏が末摘花と対面して、その余りな容貌・仕草に衝撃を受け、気の毒に思われてならず、「いとほしくあはれにて、いとど急ぎ出で給ふ」(①294頁6〜7行)とあるように、そそくさと退出してしまふ場面を意識してゐよう。

「一詠」は「一觴一詠、亦足以暢_二叙幽情_一」(王羲之「蘭亭叙」)「遇_レ物輒_一一詠、一詠傾_二三觴_一」(「洛中偶作」『白氏文集』卷八・〇三七九)などに見える。ここでは一首の和歌のこ

と。歳としの暮よるれに、末摘花すえとけが光源氏みげに元旦あけふの晴着はるぎを贈たまつてくる
「今様の色のえゆるすまじく艶つやなう古めきたる、直衣なほぎの裏表うらおもてひ
としようこまやかなる、いとなほなほしうつまづまぞ見えたる」

(①300頁3〜5行) その衣ころもに、彼もすつかり呆ぼろれ果はて、「なつか
しき色いろともなしに何なににこのすゑつむ花はなを袖そでにふれけむ」と彼女
からの書かみの端はなにすさび書きしたのであつたが、抑作品中の彼女
はこの歌から末摘花と呼ばれるようになったのであつた。猶、
「妓こ有あ三さん楚素そ名な、年とし二十餘にじゅうよ、綽あだ々々有あ三さん歌舞かぶ態たい、善唱ぜんたう三さん楊柳やうりゆう、
人多おほ以もつ三さん曲名きよく名なレ之これ、由よし是こゝ名聞なをん三さん洛下らくげ」(「不能忘情吟」同卷
七〇・三六一〇)は「名聞」の一例。

「梅艶」は句いたつ美しい梅花ばいげで、「望のぞ三さん鶴晴飛かくしやうひ三さん千里せんり」、
思おも三さん梅うめ艶えん三さん九重門くわうじゅうもん」(「聞き下げ群臣侍ぐんしんじ三さん内宴ないえん一いつ賦ひ中ちゆう花鳥共逢はなとりどもとあは逢あ春聊しゆりやうりやう」
製せい二に一篇ひつぽう寄よ三さん上かみ前まへ濃州田別駕のうしゅうでんべつが」(「菅家文章」卷四)とある。末
句は卷末の「日のいとすららかなるに、いつしかと霞かすみみわたれ
る梢えだどもの、心こゝろもとなき中なかつちゆうにも、梅うめは気色きしきばみほほ笑わらみ渡わたれる、
とりわきて見ゆ。階はし隱かげのものとの紅梅べにうめ、いととく咲さく花はなにて、
色いろづきにけり。(源氏)紅べにの花はなぞあやなくうとまるる梅うめの立ち
枝えだはなつかしけれど」(①306頁12行〜307頁4行)とある二条院
での場面を念頭に置いて作つたものであろう。殊ことに「紅べにい花はなは

どうしても好きになれない、紅梅べにうめの高たかく伸びた枝えだには心引かれ
るけれど」という意の彼の和歌をそのまま一句に成したと言っ
ても良いようである。

七 紅葉賀

幸あゆ朱雀院すゑかづね賀が仙算せんさん 朱雀院すゑかづねに幸あゆし 仙算せんさんを賀がす
百辟相従ひやくへくあひついで各おの竭の忠ちゆう 百辟相従ひやくへくあひついで 各おのの忠ちゆうを竭つくす
残菊頭ざんきくづ花はな装ま暮くれ雨あめ 残菊ざんきくの頭づの花はなは 暮雨くれあめに装まひ
承香じやうかう御子みこ舞ま秋風あきかぜ 承香じやうかうの御子みこは 秋風あきかぜを舞まふ
遇雲ぐうん清管しやうくわん緑池りよくい上かみ 雲うんを遇あむる清管しやうくわんは 緑池りよくいの上かみ
廻雪くわいせつ入い綾あや紅葉べにがは中なかつちゆう 雪ゆきを廻くわらす入い綾あやは 紅葉べにがはの中なかつちゆう
源氏げんじ今宵けふ昇あ月位げつゐ 源氏げんじ 今宵けふ 月位げつゐに昇あり
群臣ぐんしん皆みな被ひ引ひ斯躬しきん 群臣ぐんしん 皆みな 斯しの躬きんに引ひかる
(七律。忠・風・中・躬(上平声東韻))

卷名の「賀」は一句目に、「紅葉」は六句目に詠込まれてい
る。後に記すように、紅葉賀べにがはがの巻の初め、朱雀院すゑかづねの舞楽まがらぎで光源
氏みげが華麗わづらひな妙舞めうぶを披露ていびやうするといふ部分で詩は詠み尽くされてい
ると言つて良い。物語の核である葵あひろの上かみとの夜離よれれや紫むらさの上かみ
の愛あい、藤壺ふじうらの出産しゆたんとそれに伴ともう光源氏みげ並びにその周囲まわりの人々ひとらの

苦惱は全く詠まれていないし、勿論源典侍との笑話なども全く顧慮の外である。だが、詩作者はあくまで巻名に添う部分を抽出して詠む姿勢なのだという点では、これ迄の作とそう大きな懸隔はないとみて良いだろうか。聯毎の訳は以下の如くである。

(桐壺帝が)朱雀院(におられる先帝のところ)に行幸な
さり、その長寿の節目のお祝いをなされました時、多くの
お仕えの方々がつき従いまして、それぞれが忠義をお尽く
しになられたのでした。

菊の色変わりした美しい花を挿頭かざしに装われ、夕暮れの時雨
かかる頃おい(光源氏様は楽の音に合わせて青海波を舞わ
れたのですが)、次の承香殿の第四皇子様が(まだ幼い童
姿にて)秋風楽を舞われたのも見物みまわでございました。

空往く雲をとどめるかという清らかな笛の音は緑の美しい
池のほとりにひびきわたり、退場する折の光源氏様の舞い
の風情は紅葉散り交う中、雪をめぐらすが如くで素晴らし
いものでございました。

光源氏様はかくて今宵正三位こよに昇進なさり、遂に公卿の位
に就かれたのでした。そして群れ居る朝臣達も皆(昇進に
浴したものですから、それもひとえに)光源氏様の御徳の

おかげなのだと思われたことでございます。

朱雀院への行幸は十月十日過ぎのことであった。「仙算」は
仙人ほどの長寿の意。「宜乎就花枝」、将也祝「仙算二」(鳥田忠
臣「就花枝」詩序)『本朝文粹』卷一一・294)「仙算千年折不
レ尽、妖氣万里弘無レ来」(藤原茂明「六月祓」『本朝無題詩』卷
一・34)などと詠まれ、ここでは上皇の寿齡を指す。ここは
五十歳の賀か。因みに「仙」は俗外の世界であることを表現す
る用字でもある。天皇や上皇、そしてその居する世界は、俗外
の存在、世界なのだ。平安朝の詩文ではしばしば宮中が神仙の
世界のように描き成されることがある。それはその場が俗外の
非日常的空間であることを意識させるレトリックに発するもの
であろう。当時の表現としては「人俗」に相對する世界は
「仙」として表現されるのが一般であった——それは中国でも
同様であつただろう——。「百辟」は百官(多くの役人達)の意。
「率茲百辟」、人致「其誠二」(任昉「宣德皇后令」)『文選』卷
三六)とある劉良注に「百辟、謂百官二」と見え、「一人負レ
屨常端默、百辟入レ門皆自媚」(「采詩官」『白氏文集』卷四・
〇一七四)「廻レ頭曉望紫微宮、百辟星前再拜風」(「典儀礼畢
簡三藤進士二」『菅家文章』卷二)などと用いられている「竭

忠」は忠誠を尽くすこと。「李斯竭^レ忠、胡亥極^レ刑」(鄒陽「獄中上書自明」『文選』卷三九)とあり、尽忠・致誠というに同じ。この首聯は「朱雀院の行幸は神無月の十日あまりなり」(①31頁1行)「行幸には、親王^{みこ}たちなど、世に残る人なく仕うまつりたまへり。春宮もおはします」(①34頁1〜2行)あたりの本文を念頭に置くものだろう。

「殘菊」は道真に依れば重陽を過ぎた菊の意(「惜^レ殘菊」詩序)『菅家文章』卷五『李朝文粹』卷一・329)だが、色変わりし始めたものや衰え損われたものをイメーヅするのが中国古典詩では一般であろう。「疏蘭尚染^レ煙、殘菊猶承^レ露」(唐太宗「山閣晚秋」)は早い一例で、「花開殘菊、傍^ニ疏籬」、葉下衰桐落^ニ寒井」(「晚秋夜」『白氏文集』卷一四・〇七四二)などの例もあるが、唐詩にはさして多くなく、それに比して本朝では菅原道真以後殊によく用いられる語彙となった。猶、十月の殘菊の宴も道真時代に既に見えているが、村上朝より醍醐天皇登遐の九月を避け、重陽節の代替として十月に行われるようになり、重要な文事の場となっている。頌聯と関わりのある物語本文は実は頌聯と関わりのある本文(「木高き顔のほひけおされたる心地すれば」)の後に続いて見えるので、まとめて

引用すれば次の通りである。「木高き紅葉の蔭に、四十人の垣代^{かた}いひ知らず吹きたてたる物の音どもにあひたる松風、まことの深山おろしと聞こえて吹きまよひ、色々に散りかふ木の葉の中より、青海波のかかやき出でたるさま、いと恐ろしきまで見ゆ。かざしの紅葉いたう散りすきて、顔のほひにけおされたる心地すれば、御前なる菊折りてなとお大將さしかへたまふ。日暮れかかかるほどにけしきばかりうちしぐれて、空のけしきさへ見知り顔なるに、さるいみじき姿に菊の色々うつろひえならぬをかざして、今日はまたなき手を尽くしたる入綾のほど、そぞろ寒くこの世のこととおほえず」(①34頁12行〜35頁7行)は第三句に、そして第四句には「承^レ香殿の御腹の四の皇子、まだ童にて、秋風樂舞ひたまへるなむさしつぎの見物なりける」(①35頁10〜11行)が意識されているであろう。猶、「秋風樂」は唐より伝来した楽に嵯峨天皇が皇太子(後の淳和天皇)南池に行幸された時、常世乙魚が勅命に依り舞いを付けたと伝えられているものである(『教訓抄』卷三)。

「過雲」は空行く雲を留める程に素晴らしい音楽という意。

「過雲(張華博物志曰。薛談学^レ謳於秦青、未^レ窮^ニ青之技^一而辞帰。青饒^レ郊、乃撫^レ節悲歌、声振^ニ林木^一、響過^ニ行雲^一。乃

謝求_レ反_レ」(「初学記」卷一五・歌)「声振_レ林木_一、響過_三行雲_一」(「列子」湯問)などあり、「過_レ雲、廻_レ雪之倫、応_三糸竹_一而通進」(菅原文時「北堂文選竟宴各詠_レ句得_三遠念_三賢士風_一」詩序)『本朝文粹』卷九・239)と詠まれる。「清管」は「清管、曲終鸚鵡語、紅旗影動駿輪嘶」(「武丘寺路宴留_三別諸妓_一」『白氏文集』卷五四・二四九八)とあり、澄んだ管楽器のひびき。「緑池」は美しい池を指して言う。「朝承_レ紫台露_一、夕潤_レ緑池風_一」(沈約「塘上行」『玉台新詠』卷五)「紅林地広、吞_三楚夢_一於胸中_一、緑池水高、縮_三吳江_一於眼下_一」(源順「賦_三葉下風枝疎_一」詩序)『本朝文粹』卷一〇・314)など見える。「廻雪」は美しい舞いの様。曹植「洛神賦」(「文選」卷一九)で神女(宓妃)の舞う姿を「髣髴兮若_三輕雲之蔽_一月、飄々兮若_三流風之廻_一雪」と表現したことに始まり、「絃鼓一声双袖拳、廻雪飄飄_レ旋蓬舞」(「胡旋女」『白氏文集』卷三・〇一三三)「嬌眼曾_レ波風欲_レ乱、舞身廻_レ雪霽猶飛」(「春娃無_レ氣力_一」『菅家文草』卷二)「廻雪の袖は楊柳風にしたがふをまねび」(「教訓抄」卷一・教訓抄序)などよく用いられる。「入綾」とは、舞人退場の時に改めて綾をつけて舞い収めることを言い、本来漢語ではない。「楽於世吹になりて後、入綾のごとくに舞曲を

如_三本儀_一舞たるなむ、まことにさをかしく、見所なく待けむ」(「教訓抄」卷一・3万歳楽)など見えている。頸聯は伶人の楽曲演奏と光源氏の青海波の舞の素晴らしさを故事を用いて表現しており、その該当本文は前掲のように「木高き紅葉の蔭に(中略)顔のほひけおされたる心地すれば」とあるあたりを殊に意識したものであろう。猶、「青海波」は入綾と関わりがあるようで、「古ハ舞畢テ退キ入時、更吹_三青海波_一」(「教訓抄」卷三)ともある。かの舞は蒼海波模様の衣を着て舞われた。龍宮の楽といわれ、昔天竺で舞われたものでもあるという。青海波の浪上に浮かんだ時、浪下に楽の音を聞いた波羅門僧正がこの楽を伝えたものとされる。初め平調楽であったものを、承和の御代に盤涉調曲に変えられ、舞は良岑安世、楽は和邇部大田麿、詠は小野篁の作と伝えられる(「教訓抄」卷三)。

「月位」は月卿の位、高位高官、公卿のこと。天皇を日に譬え、臣下を月に譬えることから言う。「王省惟歳、卿士惟月」(「尚書」洪範)「月卿臨_三幕府_一、星使出_三詞曹_一」(高適「送_下柴司戸充_三劉判官_一之_三嶺外_上」)など見え、「月卿光を争ひ、雲客色を重て艶言をつくし」(「海道記」蒲原より木瀬川)と用いられている。尾聯は「その夜、源氏の中將正三位したまふ。頭

中将正下の加階したまふ。上達部は、みなさるべきかぎりよろこびしたまふも、この君にひかれたまへるなれば、人の目をもおどろかし、心をも喜ばせたまふ、昔の世ゆかしげなり(①) 315頁13行(316頁1行)とある本文に対応しているものと考えられる。

八 花宴

南殿桜陰観舞曲

南殿の桜の陰にて 舞曲を観る

加之詩客接襟陪

加之詩客も襟を接へて陪る

隔簾佳妓可争寵

簾を隔てて 佳妓とも寵を争ふべく

列座老儒不愧才

座に列なりて 老儒にも才を愧ぢず

千里昔篇看月詠

千里が昔の篇は 月を見て詠み

九禁春宴被花催

九禁の春の宴は 花に催さる

醉中私語聞三口

酔ふ中に 私語を三の口に聞く

所恨草原風露摧

恨む所は草原に 風の露と摧けたること

〈七律。陪・才・催・摧(上平声仄韻)〉

「花宴」の呼称は早く嵯峨朝に見えるが、それはこの物語に見えるような宮中観桜の宴ではない。『河海抄』(巻四・花宴)に示されるように宇多・醍醐朝の頃より清凉殿で桜を賞美する

宴が行われるようになる。村上朝頃に『新儀式』に記されるように公宴として規定、恒例化したものの一条朝以後は開催されなくなり、密宴(天皇の私的詩宴で、臨時であることも少なくない)の中に埋れていったという。とすれば嘗ての盛事を回顧的に物語の中に組入れ再現しようとしたことにならうか。卷名は第六句に分散して詠込まれている。賦詩は花宴とそのすぐ後の光源氏と朧月夜との出逢いに関わる場面を中心に詠んでいるようである。通釈を聯毎に記せば次のようになるだろうか。

(二月二十日あまりに花宴が催され) 帝は(中宮や東宮・上達部らと共に)南殿の桜の方で舞樂を御覧になられたの

でしたが、そのみならず、(詩文の嗜みある)詩人達も列席して漢詩をお作りになられたのでした。

御簾を隔て、舞妓と(さながら帝の)寵を争うようで(春宮様のお勧めで光源氏様が少し舞われると、他にたとえようもない程で)ありましたし、この花宴の席に列席している年老いた博士などに比べても(光源氏様の)詩文をお作りになる才は決して劣るようなものではございません(で、講師も誦じつつ称え、博士達も感服申し上げる次第でございました)。

(夜更け宴果てて、月が明るくさし出で風情がございました折しも春のこととて) 大江千里様が昔詠まれた「照りもせず曇もはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき」の詠を想起こしたりされるのです。(勿論春の朧月夜も良いものですが) 宮中の春の宴(花宴)はうるわしき花の開くに依り催されるものでございます。

(宴果てて後、光源氏様が) 酔心地に忍び歩きをしておられますと、(弘徽殿の細殿の) 第三間めの戸口にてひそやかに(先の千里の) 歌の口ずさまれる声を耳にされたのでした。(酔いに任せて、後に朧月夜の君と称される彼女を抱きすくめ愛しみなさると) 彼女は草の原の風に吹かれる露のようにはかない身の上を怨まれるのでございました。

「南殿」は紫宸殿のこと、ここは左近の桜を意識するが、紫宸殿花宴の例は康保二年(九六五)が知られるくらいである。「桜陰」は桜の花かけ、桜下の意で、「半漢乗レ晴穠李側、浮雲投レ暮落桜陰」(菅原庶幾「尋レ春信レ馬行」「類聚句題抄」138)「桜がり雨はふりきぬ同じくはぬるとも花の陰にかくれむ」(『拾遺集』50・読人不知)「花のかけたたまくをしき今夜哉錦をさらす庭とみえつつ」(『後拾遺集』139・清原元輔)などを見

える。「舞曲」は舞いと楽曲。「古之舞曲有レ廻鸞舞(下略)」「音客有レ觀レ舞於淮南」者上(張衡「舞賦」『初学記』卷一五・舞)「歌声越レ齊市、舞曲冠レ平陽」(李德林「夏日」)などの例参照。「加之」は「シカノミナラズ」(『類聚名義抄』「色葉字類抄」)。「夾レ帽長覆レ耳、重レ裘寬裹レ身、加レ之レ一盃酒、煦嫗如レ陽春」(「歳暮」『白氏文集』卷六二・二九七二)「若皆選謫、恐失レ善人。加レ之惡逆之主、猶処レ輕科」(「三善清行「奉レ左丞相」書」『本朝文粹』卷七・一八八)などと用いられている。「詩客」は詩人。ここは花宴に招かれた詩人で、桜下に座が設けられた。「白馬走迎レ詩客、去、紅筵鋪待レ舞人」(「和レ薛秀才尋レ梅花」同飲見と贈」『白氏文集』卷二〇・一三四六)「今年内宴、有レ勅賦レ春雪映レ早梅」。内宴後朝、右丞相招レ詩客五六人、賦レ東風粧レ梅」(「書齋雨日独对レ梅花」詩自注「菅家文章」卷二)はその語例。「接襟」は(列席して)交わる意で、「連レ袖接レ衿、誰謂レ農夫田父之客」(大江以言「九月十五夜於三子州楠本道場」擬レ勤学会「聴レ講レ法華經」同賦「寿命不可レ量詩序」『本朝文粹』卷一〇・二八〇)と詠まれる。この首聯で詠まれているのは、巻の冒頭の「二月の二十日あまり、南殿の桜の宴させたまふ。后、春宮の御局、左右

にして参上りたまふ。(中略) 日いとよく晴れて、空のけしき、鳥の声も心地よげなるに親王たち、上達部よりはじめて、その道のはみな探韻賜りて文作りたまふ。宰相中将(光源氏)「春といふ文字賜れり」とのたまふ声さへ、例の、人にことなり」(①353頁1〜8行) あたりを意識したものであろうか。「隔簾」は御簾を隔てて。「桜桃落レ御頼、夜合隔レ簾花」(「春尽勸三客酒」)『白氏文集』巻五四・二四七二)「鳩鸞連レ袂謳吟、窈窕隔レ簾談笑」(藤原齊信「後一条院御時一宮御着袴翌日宴和歌序」『本朝文粹』巻一一・三四六)などの例がある。物語本文には見えないが、当然帝の御座の前には御簾が下ろされている。そして、「楽どもなどは、さらにもいはず調べさせたまへり。やうやう入日になるほど、春の鶯囀るといふ舞いとおもしろく見ゆるに、源氏の御紅葉の賀のをり申し出でられて、春宮、かざし賜せて、切に責めのたまはするにのがれがたくて、立ちて、のどかに袖かへすところを一をれ気色ばかり舞ひたまへるに、似るべきものなく見ゆ。左大臣、恨めしさも忘れて涙落したまふ」(①354頁6〜12行)と語られる場面が重ねられよう。「佳妓」は美しい舞妓を言う。「繁絃似レ玉紛々碎、佳妓如レ鴻一一驚」(陸龜蒙「龔美留三振文一宴龜蒙不赴」)「温樹今迷回雪色、

梨園佳妓欲三相争」(源明理「度レ水落花舞」)『本朝麗藻』巻上)などと詠まれるが、物語本文中には舞妓のこと見えない。「春鶯囀」を舞った主語を佳妓としたものか、それとも光源氏の舞いが佳妓並に素晴らしかつたことを言いたかつたものか。「争寵」は「求レ榮争レ寵任三紛々一、脱三棄金貂祗有君」(「題三崔常侍济上別墅」)『白氏文集』巻五七・二八〇一)などに見え、ここでは帝の寵愛を争うこと。「列座」は座席につらなる意。光源氏に次いで、頭中将が柳花怨を見事に舞いきり御衣を賜る場面があり、その後に「文など講ずるにも源氏の君の御をば、講師も之読みやらす、句ごとに誦じのしる。博士ども、の心にもいみじう思へり」(①355頁1〜3行)と見えるところや、それより前、首聯の探韻詩を作ることになった後に、「さての人々は、みな臆しがちにはなじろめる多かり。地下の人は、まして、帝、春宮の御才かしくすぐれておはします、かかる方にやむごとなき人多くものしたまふところなるに、恥づかし、はるばるとくもりなき庭に立ち出づるほどはしたなくて、やすきことなれど苦しげなり。年老いたる博士ども、の、なりあやしくやつれて、例馴れたる」(①353頁11行〜354頁4行)様子が描かれていたこともふまえられていよう。「引以為三流觴曲

水^二、列^二坐其次^二（王羲之「蘭亭叙」）「文物多師^レ古、朝廷半老儒」（杜甫「行次昭陵」）は「列座」「老儒」の一例。「老儒」はここでは文章博士を指しているよう。

頸聯は花宴の果てた後、光源氏が明るくさし出た月下に酔心地に任せて好き心を起こし、弘徽殿の細殿の三の口の戸が開いているのを見つけ中を窺う場面。人の寝静まった後、「いと若うをかしげなる声の、なべての人とは聞こえぬ、朧月夜に似るものぞなき、とうち誦じて、こなたさまには来るものか」（①356頁8〜10行）と見える和歌詠（「てりもせずくもりもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき」「大江千里集」「新古今集」55）が「千里昔篇」である。言うまでもなく、『白氏文集』（卷一四・〇七六五）「嘉陵夜有^レ懷^二一首」其二の「不^レ明、不^レ聞、朧々月、非^レ暖非^レ寒漫々風」（『千載佳句』卷上・春夜83『新撰朗詠集』卷上・春夜23）を題に詠んだものである。「九禁」は九重の禁門（宮中）の意。「九禁、光明今悦予、便知皇葉万年間」（『初冬庚申侍宴同賦^二燕雀相賀^一』、『江吏部集』卷下）などと詠まれている。この第六句は前掲冒頭の一節「二月二十日あまり、南殿の桜の宴せさせたまふ」を意識して、宮中の春の宴（花宴）は桜花の盛んに開くに依り催されるものだとして述べてい

ることになる。

尾聯の第七句も、物語本文では頸聯と殆ど同じく、「月いと明うさし出でてをかしきを、源氏の君酔ひ心地に、見すぐしがたくおぼえたまひければ、上の人々もうちやすみて、かやうに思ひかけぬほどに、もしさりぬべき隙もやあると、藤壺わたりをわりなう忍びてうかがひ歩けど、語らふべき戸口も鎖してければ、うち嘆きて、なほあらじに、弘徽殿の細殿に立ち寄りたまへれば、三の口開きたり。（中略）やをら上りてのぞきたまふ。人はみな寝たるべし。いと若うをかしげなる声の、なべての人とは聞こえぬ、朧月夜に似るものぞなき、とうち誦じて、こなたさまには来るものか」（①355頁13行〜356頁10行）とあるあたりを念頭に置いて作っているだろう。「私語」とはひそやかな語り、その声という程の意で、「七月七日長生殿、夜半無人私語時」（『長恨歌』、『白氏文集』卷一一・〇五九六）「大絃嘈々如^二急雨^一、小絃切々如^二私語^一」（『琵琶引』同上・〇六〇二）は有名な例。末句は光源氏が見染めた朧月夜を細殿に抱きかかえ、戸を閉めて口説くと、「うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじと思ふ」（①357頁13〜14行）と妖艶に詠んで、光源氏も「いづれぞと露のやどりをわかむまに小

篠が原に風もこそ吹け」(① 358頁2〜3行)と応じる場面を背景にしよう。強いて名前を聞き出そうとする彼に、彼女は「私がこの世から消えてしまつたら、草の原を分けて迄、私を尋ねたりはしますまい」と引いた態度を示すが、それでは露のようにはないあなたの宿を見分ける前に風が吹き渡つて、せつかくの縁も切れてしまつと彼は口説いていたのである。

注

- (1) 一条朝(『本朝麗藻』)頃には詩歌によく見えるようになる表現と言えよう。近藤みゆき「見渡せば」と「眺望」詩」(『古代後期和歌文学の研究』風間書房・二〇〇五年)参照。
- (2) 滝川幸司「花宴」(『天皇と文壇——平安前期の公的文学——』和泉書院・二〇〇七年)参照。